

学位論文要旨

母親の対児行動と子どもの対人行動との関連  
-幼稚園登園場面の縦断的観察を通して-

権田 あずさ

## 論文目次

### 第1章 序論 研究の背景と目的

#### 第1節 親子のアタッチメント

#### 第2節 集団保育場面における子どもの対人行動の発達と母親との関係

#### 第3節 幼稚園の登園場面における母親の役割

#### 第4節 本研究の目的

### 第2章 研究1 日常的な母子のかかわりと母親の対児感情

#### 第1節 幼稚園3歳児の日常的な母子のかかわりと

園生活の進行に伴う母親の気持ちの変化

#### 第2節 5歳児に対する母親の日常的なかかわりかけ-3歳時と比較して-

#### 第3節 子どもの3歳時と5歳時における母親の対児感情

### 第3章 研究2 幼稚園登園場面における母親の対児行動

#### 第1節 幼稚園3歳児の登園場面における母親の対児行動

#### 第2節 幼稚園5歳児の登園場面における母親の対児行動-3歳時との比較-

### 第4章 研究3 幼稚園自由遊び場面における子どもの対人行動と

母親の対児行動との関連

#### 第1節 3歳時と5歳時における自由遊び場面の子どもの対人行動

#### 第2節 母親の対児行動と子どもの対人行動との関連

### 第5章 総合論議

### 引用文献

## 第1章 序論 研究の背景と目的

### 第1節 親子のアタッチメント

アタッチメント (Attachment) とは、乳幼児に危機や不安というネガティブな情動が喚起されたときに、それを養育的、保護的な立場にある者とくっつく、あるいは、絶えず接触しているということによって、低減・調節しようとする行動制御システムのことである (Bowlby, 1969/1983)。乳幼児心理学や発達心理学の分野では、アタッチメントの語を、より特異的に、親 (特に母親) と子との間に形成される緊密な情緒的絆として用いることが多い。そのため、アタッチメントの日本語訳としては「愛着」という訳語が定着しているが、本論では Bowlby の本来の定義に立ち返り、「アタッチメント」という用語をそのまま用いる。アタッチメントは、まず、母親などの養育者との間で育まれ、その後、他の人との結びつきを可能とする。子どもがアタッチメントを形成していく要因として重要な役割を果たすと言われているのが、親子の間で交わされる身体接触である。われわれが精神的健康、身体的健康の両方を得るには、親子の身体接触が大きな鍵であり、とりわけ、乳児期の母子の身体接触の重要性を指摘する研究者は少なくない。アカゲザルの代理母実験を行った Harlow (1958) は、アタッチメントの形成要因として、接触経験が重要な役割を果たしているとして述べ、ヒトの母子関係の実証的研究を行った Ainsworth (1978/1983) も、親子のアタッチメント形成に最も重要なのは身体接触であることを指摘している。このように、われわれヒトの親と子との間で交わされる相互交渉のうち、特に身体接触は、親子の絆を深め、子どもがアタッチメントを形成していく上で重要な役割をもつことが明らかにされている。子どもの性別による他者からの身体接触について、Clay (1966) は、乳児が両親や周囲の人々から接触を受ける頻度は、男児よりも女児のほうが頻繁であることを示している。青木 (2001) も、母親が子どもへのキスやほおずりを停止した時期は、息子よりも娘のほうが遅いことを明らかにしている。このように、乳幼児期における他者からの身体接触は、男児よりも女児に多いことが明らかにされている。

また、Ainsworth & Witting (1969) は、アタッチメント関係の個人差に注目し、安定したアタッチメントをもつ乳児の母親は、子どもの行動に敏感で反動的であり、子どものしていることを妨げることが少なかったことを報告している。このように、子どもが安定したアタッチメントを形成するには、母親の乳児に対する感性や適切な応答、情愛的な身体接触などが重要であるとされている。アタッチメントは、乳児期に他者によって受動的にもたらされるものから、幼児期に子ども自らが能動的に築き上げるものへと、また、安全の感覚をもつばら「物理的近接」(実際にくっつくこと) によってのみ得られる状態から、それを「表象的近接」(イメージや主観的確信による近接の感覚) によっても部分的に得られる状態へと、漸次的に移行していく (遠藤, 2005)。つまり、3歳以降の幼児期後期の子どもは、アタッチメント発達の移行期であると言え、この時期における母親などの養育者の子どもへのかかわりかけが、子どものアタッチメント発達には重要である。

### 第2節 集団保育場面における子どもの対人行動の発達と母親との関係

多くの子どもは、3歳になると幼稚園や保育所などの集団保育施設に通い始める。集団保育施設での生活を通して、子どもたちは、それまでの両親を中心とした大人との関係を一時的に離れ、同

年齢の子どもたちとの社会的な交流を通して、学童期から思春期へとますます重要性を増す仲間関係の基礎を形成していかなければならない。Bowlby (1969/1983) によると、親子関係以外の人間関係は、親子の相互作用を通して作られた自己と他者に関する表象モデル（内的ワーキングモデル）に照らして展開される。さらに彼は、母親への信頼が内的ワーキングモデルとして内面化され、対人関係一般への信頼をもたらすと同時に、自分は愛され支持されるに値する存在であるという自分自身に対する肯定的な表象や感情をもつ子どもは、仲間関係においても適応しやすいと述べている。

集団保育を通して子どもは、同年齢の仲間との遊びの中で生じる物の取り合いやけんか、対立といった問題の解決方法を経験的に学び、これらの経験を通して、次第に高次の社会的スキルを身につけていく。社会的スキルとは、ヒトが集団の中で生きていく上で重要な能力のことであり、そのひとつに、他者に対する向社会的行動がある。Eisenberg, Lennon & Roth (1983) は、向社会的行動を「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとする自発的な行為」と定義している。この向社会的行動は、一般に4～5歳齢ごろから顕著に発達するといわれており、子どもの向社会的行動に影響を与える要因のひとつとして母親の養育態度が挙げられ、これまで多くの研究がなされてきた (Baumrind, 1966; Lewis, 1981; Putallaz & Heflin, 1990; Grusec & Goodnow, 1994; Ladd & Sieur, 1995)。アタッチメントが安定している子どもは、向社会的・共感的な行動が多い (Kestenbaum, Farber & Sroufe, 1989) ことや、母親の受容的態度が強いほど子どもは向社会的行動を多く行うことが明らかにされている (森下, 1998)。また、本島 (2012) は、乳児期における子どものアタッチメント安定性が幼児期における子どもの情動理解と問題行動とにどのように関連するのかについての縦断的検討を行い、生後18ヵ月（1歳半）にアタッチメントの安定性が高い子どもほど、生後30ヵ月（2歳半）において情動理解が高く、また生後42ヵ月（3歳半）における問題行動が少なかったことを明らかにしている。さらに本島 (2012) は、子どもの安定したアタッチメントと、後の子どもの種々の社会情動コンピテンスとの関連についての研究の多くは国外で行われており、日本においてはほとんど検討がなされていないことを指摘し、その研究の必要性を述べている。

### 第3節 幼稚園の登園場面における母親の役割

3年保育での幼稚園への入園は、3歳児とその母親にとって、初めての長期的分離であることが多い。アタッチメント理論に基づけば、子どもはまず家庭内で、主たる保育者である母親に対してアタッチメントを形成する。母親は子どもにとって新しい環境を探索するための安全基地 (secure base) として機能し、母親とのアタッチメントを根幹として、子どもは母親以外の他者との関係を築いていくことになる。家庭保育から集団保育への転換に際し、子どもは集団保育施設への入園を機に、家族から教師、他児へと徐々にそのアタッチメントの対象を拡げていかなければならない。園田・北村・遠藤 (2005) はアタッチメントの対象を複数もつことの重要性を指摘しており、集団保育施設への入園を契機とする、家族から他者へのアタッチメント対象の拡がり、子どもが社会に適応していくための第一歩である。そのため、子どもが生まれて初めて集団の場に入っていく際、子どもにとっての根源的なアタッチメント対象である母親が、子どもに対してどのようにかわる

かが、子どもがアタッチメント対象を拡張し、豊かな人間関係を築いていくためには重要である。

幼稚園生活においては、主となるアタッチメント対象である母親がいないため、子どもは、母親の代わりに近くにいる教師や友人を一時的な安全基地として利用していると考えられる。本研究では、子どもがアタッチメントの対象を母親から他者へと一時的に切り替えなければならない場面である、幼稚園の登園場面に着目した。登園場面は、母子が物理的に離れなければならない場面であり、日常的に繰り返される場面である。このような場面では、母親が子どもにとって安全基地としての機能を十分に果たし、子どもが安心して集団の場に入っていけるように促すことが求められる。登園場面での母親の行動特性を、日本と中国とで比較検証した高（2005）は、日本の母親は、子どもとの共同作業や間接的な分離表現を通して、子どもが自然に母親から離れ、集団に移行できるような、様々な対児行動を表出したと報告している。登園場面では、母親との分離や集団へ入っていくことに対する不安を抱く子どもに対して、母親が身体接触を多く表出することが期待できる。

#### 第4節 本研究の目的

本研究では、幼稚園の登園場面での母親の対児行動と、子どもが自由な発想で遊びを展開する幼稚園の自由遊び場面における子どもの対人行動の特徴を明らかにした上で、母親の対児行動と子どもの対人行動、特に向社会的行動との関連を検証することを目的とする。

上記の目的を明らかにするために、以下の3つの研究を縦断的に行う。研究1では、初めて子どもを集団の場へ預ける母親の気持ちの変化と、3歳時および5歳時における日常的な母子のかかわりの様子、およびそれぞれの時期における母親の子どもに対するイメージを、質問紙を用いて明らかにする（第2章）。研究2では、アタッチメント対象を母親から他者へと一時的に切り替えなければならない場面において、母親がどのようなかかわりかけをしているのかを、子どもが幼稚園に入園したばかりの3歳時と年長になった5歳時における母親の対児行動を分析することによって明らかにする（第3章）。研究3では、子どもが幼稚園の自由遊び場面において、他児や教師に対して表出する対人行動の特徴を明らかにし、母親の対児行動との関連を検証する（第4章）。本論における研究2および研究3は、対象者による主観的報告に依存する危険性のある質問紙調査法ではなく、対象者が（例えば無意識であっても）表出する行動を客観的に捉え、行動を数量化し、科学的に分析することが可能である自然観察法を採用する。母子の分離場面である幼稚園の登園場面において、母親が子どもにどのように接し、そして送り出しているのかを、詳細に分析し、かつ縦断的に研究したものはこれまでになく、これらを明らかにすることは母親支援のひとつの手段にもなり得ると考えられる。また、母親の行動と子どもの向社会的行動との関連を検証した研究は日本では少なく、その方面の研究蓄積の一助となると考えられる。

なお、本論では、3～4歳児が在籍する年少児クラスの子どものみを3歳児、5～6歳児が在籍する年長児クラスの子どものみを5歳児と表記する。

## 第2章 研究1 日常的な母子のかかわりと母親の対児感情

## 第1節 幼稚園3歳児の日常的な母子のかかわりと園生活の進行に伴う母親の気持ちの変化

本節では、我が子を初めて集団保育の場に預ける母親が、日常的に子どもにどのような世話行動を行い、どの程度一緒に行動（以下、共行動）しているのかを質問紙によって明らかにする。その上で、園生活の進行に伴って母親の子どもに対する気持ちがどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。

本節の調査対象者は、2009年4月に、広島県H市内のF幼稚園の3歳児クラスに3年保育で入園した園児19名（男児9名、女児10名）の母親18名（男児の中に1組の二卵性双生児がいたため）であった。調査開始時における18名の母親の平均年齢は、33.8歳（レンジ：24～44歳）であった。

子どもの着替えを手伝ったり、トイレを手伝ったりするような、日常的な世話行動の頻度は、ほとんどの母親において入園前から入園後に低下した。これは母親の子どもに対する世話行動が、子どもの発達や意欲と深く関連するためであると考えられる。子どもの発達が遅い場合、母親は子どもの生活行動を手伝う必要があるだろうし、逆に自分で身の回りのことができる子どもは必ずしも母親が手伝う必要はない。ある女兒の母親が、入園前にも入園後にも最も世話行動得点が高かったが、これは、この子どもの月齢がクラスで最も低く、母親が子どもを手伝う必要があったためであると考えられた。

一方、母親が子どもと一緒にご飯を食べたり、一緒にお風呂に入ったりするような共行動の頻度が入園前に高かった母親は、入園後における共行動の頻度も高かった。これらの母親は、調査期間を通して、子どもが先生の言うことを聞いているか心配であり、幼稚園へ子どもを預けている間、子どものことが気になり、子どもと離れているとさみしいと回答したが、子どもはいずれも第1子であった。母親が第1子を幼稚園へ預ける場合は、そうでない場合よりも、母親が子どもを幼稚園へ預けることに心配感を抱いたり、子どもと離れることに対してさみしさを感じたりすると考えられた。さらに、日常的に共行動の頻度が高い母親は、子どもと離れることに対して強い不安感を抱き、さみしいと感じていた。しかし、同じく子どもが第1子である母親の中には、調査期間中ずっと、友達ができたか心配であり、先生の言うことが聞いているか心配であり、幼稚園へ預けている間、子どものことが気になると回答したにも関わらず、共行動得点は入園前後ともに高くなかった母親たちもいた。先に述べた母親とこれらの母親との違いは、子どもと離れていることに対するさみしさであると考えられた。子どもが第1子であり、子どもと離れることに対して強いさみしさを感じていた母親は、日常的に子どもとの共行動の頻度が高い母親であったと言える。

世話行動得点の高低と、子どもと離れることに対する母親の気持ちとの間には関連は認められなかった。しかし、共行動得点が高かった母親は、子どもと離れることに対して、「気になる」または「さみしい」と回答し、共行動得点が低かった母親は、「気にならない」または「さみしくない」と回答したことから、共行動の頻度と子どもと離れることに対する母親の気持ちには関連があると考えられた。

## 第2節 5歳児に対する母親の日常的なかかわりかけ-3歳時と比較して-

本節では、5歳の子どもに対して、母親がどのような世話行動を日常的に行い、子どもとどのよ

うな共行動を行っているのか、その特徴を子どもの3歳時に行った質問紙調査の結果と比較することによって明らかにすることを目的とした。

本節の調査対象者は、2011年4月に5歳児クラスに在籍していた3年保育の園児の母親であった。しかし、4歳児クラスへ進級する際に他の園へ転園した男児が1名いたため、実際に調査対象としたのは17名の母親であった。3歳時と5歳時との比較を行う際には、3歳時のデータからこの男児の母親を除外した。

子どもの5歳時の母親の日常的な世話行動の頻度は、3歳時と比較して大きく低下した。特に、着替えやトイレの手伝いなど、子どもの生活行動の発達が深く関連する項目における低下が顕著であった。母親の子どもとの共行動の頻度も、同様に低下した。男児の母親が子どもと特に一緒にしていた行動は、夕食を食べることであったが、女児の母親はこれに加え、朝食を一緒に食べ、お風呂にも一緒に入るなど、その範囲が広がった。この傾向は子どもが3歳の時にも同様に認められたことから、一般に女児の母親は、男児の母親よりも多くの時間を子どもと一緒に過ごしていることが明らかとなった。

### 第3節 子どもの3歳時と5歳時における母親の対児感情

本節では、母親が自分の子どもに対して抱いている感情を、対児感情評定尺度（花沢，1992）を用いて検証した。

本研究では、3歳時と5歳時の両方のデータがそろっている16名（男児7名、女児9名）の母親を分析対象とした。3歳時と5歳時の母親の対児感情得点を比較した（対応のある $t$ 検定）が、接近得点<sup>注1)</sup>と回避得点<sup>注2)</sup>、および拮抗指数<sup>注3)</sup>のいずれにおいても、有意な差は認められなかった。しかし、いずれの感情得点においても、3歳時よりも5歳時のほうが、得点の分散が小さかったことから、子どもが5歳になると、1人1人の母親の子どもに対する感情は、ある一定のレベルに落ち着くのではないかと考えられた。Mann-Whitneyの $U$ 検定を用いて、子どもの性別による母親の対児感情得点の違いを検証したところ、5歳時において、男児の母親の回避得点と拮抗指数は女児の母親よりも高い傾向が認められた（回避得点： $U=14$ ， $p<0.1$ ，拮抗指数： $U=13$ ， $p<0.05$ ）。また、有意ではなかったものの、3歳時と5歳時のいずれにおいても、女児の母親の接近得点は男児の母親よりも高い傾向がみられた。このことから、本研究で対象とした女児の母親は、男児の母親よりも子どもに対して肯定的な感情を抱き、否定的な感情をあまり抱いていなかったと言える。

---

注1) 接近得点：親の子どもに対する親和的（肯定的）な感情得点

注2) 回避得点：親の子どもに対する否定的（拒否的）な感情得点

注3) 拮抗指数＝回避得点÷接近得点×100

## 第3章 研究2 幼稚園登園場面における母親の対児行動

### 第1節 幼稚園3歳児の登園場面における母親の対児行動

本節では、幼稚園入園から間もない3歳児の登園場面において、母親が愛情表出や世話などの対児行動をどのように表出しているか、その特徴を明らかにすることを目的とした。

本節の観察対象者は、第2章第1節と同じ18名の母親（男児の母親8名、女児の母親10名）であった。ビデオを用いた観察は、入園式を除いた初めての登園を含む2009年4月13日から同年9月17日までの6ヵ月間に渡って行い、合計で50回の登園場面のデータ収集を行った。1回の観察時間はおよそ40分間であったため、総観察時間は約2000分であった。分析した母親の行動は、「愛情表出行動（母親が子どもに愛情を伝える行動。例えば、なでる、抱きしめる、笑顔など）」、「世話行動（母親が子どもの登園を手伝う行動。例えば、補助、指差しなど）」、「分離時特有の行動（主に母子の分離の際に見られるあいさつ行動や儀式的な行動。例えば、手をふる、あいさつをするなど）」であった。

母親が子どもに対して最も多く表出した行動は、子どもが自分で行わなければならないことになっている支度の手伝いやそれに関わる指示、促しなどの世話行動であった。母親は、登園してすぐの時間帯に、これらの世話行動を多く行っていた一方で、子どもと分離する直前の時間帯には、愛情表出行動と分離時特有の行動の出現が多かった。子どもを優しくなでたり、ぎゅっと抱きしめたりするような愛情表出行動が、母子の分離直前に多く観察されたことは、子どもが安心して母親と離れ、幼稚園生活に入っていけるように、母親が子どもに安心感を与える行動として行っていたと考えられる。

子どもとの分離時に、女児の母親が示した愛情表出行動と分離時特有の行動は、男児の母親よりも有意に多かった（愛情表出行動： $t=2.32$ ,  $p<0.05$ , 分離時特有の行動： $t=2.16$ ,  $p<0.05$ ）。第2章第1節で、女児の母親は男児の母親よりも、子どもと離れることに対するさみしさを強く抱いていたことを指摘したが、女児に対する愛情表出行動や別れのあいさつ行動の多さは、そのような感情と関連していると考えられる。

個々の母親の行動をみると、第1子、特に一人っ子である子どもの母親は対児行動が多く、その子どもの月齢が小さい場合には、母親の対児行動の出現頻度はさらに高い傾向がみられた。また、第1子であっても下にきょうだいのいる子どもの母親や、第2子以降の子どもの母親には、直接的な対児行動があまり見られず、笑顔で見守りながら、分離の際に手をふったり、別れのあいさつを交わしたりすることが多くみられた。

## 第2節 幼稚園5歳児の登園場面における母親の対児行動-3歳時との比較-

3歳児は、家族以外の他者にアタッチメント対象を拡げる初期段階であるが、5歳児はすでに複数のアタッチメント対象をもつことが推察される。そのような5歳児に対して、母親はどのように接し、そして幼稚園へ送り出しているのだろうか。本節では、前節で観察した母子と同じ母子を対象（ただし、4歳児クラス進級時に転園した1組の母子を除く）に、子どもの5歳時における登園場面の母親の対児行動を観察することにより、子どもの年齢に応じた母親の対児行動の特徴を明らかにすることを目的とした。

5歳時の観察においては、3歳時の観察項目に、「見守る（母親が2秒以上子どもを見続けること）」



や、「補助可能距離（子どもがクラスへ入る準備をしているとき、母親が子どもを手伝える距離にすること）」などの行動を追加して観察した。5歳時の観察は、2011年6月14日から2012年3月14日までの9ヵ月間に渡って行い、合計で44回の登園場面のデータ収集を行った。1日あたりの観察時間はおよそ40分間であったため、総観察時間は約1660分であった。

母親の愛情表出行動と世話行動は、行動のレパトリーと出現割合のいずれにおいても、3歳時から5歳時にかけて減少し、低下した。しかし、母親が子どもとの分離の際に、手をふったり、「バイバイ」と言ったりするあいさつ行動などの分離時特有の行動は減少しなかった。子どもが5歳になると、ほとんどの子どもが自分でクラスへ入る準備をすることができるため、母親の世話行動が減少することは当然のことと言えるであろう。また、新入園児である3歳児やその母親にとって、登園場面での別れは容易ではなかったと考えられる。その場合、母親は子どもをなでたり、抱きしめたりなどの愛情表出行動を行って子どもをなだめたに違いない。そのため、5歳時よりも3歳時に愛情表出行動が多く観察されたことも理解できる。このように、3歳と5歳とでは、母子双方の状況が大きく異なっていることが想像できるにも関わらず、3歳時と5歳時の分離時特有の行動は、同程度の出現頻度であった。このことから、分離時に母子が交わすあいさつ行動は、子どもがアタッチメント対象を母親から教師や他児へと一時的に切り替えるためのスイッチのような役割をもった行動であると考えられた。

母親の対児行動について、女兒の母親に、愛情表出行動と分離時特有の行動が多く観察される傾向は、5歳時においても3歳時と同様に認められた。また、5歳時のみに観察した「見守る」や「補助可能距離」の出現割合も、女兒の母親のほうが男児の母親よりも高かった。

個々の母親をみると、3歳時に愛情表出行動が多かった母親は、5歳時においても表出する傾向があり、このような傾向は、世話行動や分離時特有の行動についても同じであった。また、3歳時の登園場面において、対児行動をほとんど行わなかった母親は、5歳時においても対児行動の表出が少なかったことから、登園場面での母親の対児行動には、ある程度の一貫性があった。

## 第4章 研究3 幼稚園自由遊び場面における子どもの対人行動と母親の対児行動との関連

### 第1節 3歳時と5歳時における自由遊び場面の子どもの対人行動

本節では、子どもが幼稚園の自由遊び場面において、他児や教師に対してどのような行動を表出しているかについて、子どもの向社会的行動の出現に焦点を当てながら分析した。

本節における3歳時の観察対象児は、研究1および研究2で対象とした18名の母親の子ども19名（男児9名、女児10名）であった。観察開始時の対象児の平均月年齢は、3歳6ヵ月（レンジ：3歳0ヵ月～4歳0ヵ月）であった。3歳時の観察期間は、入園式を除いた初めての登園を含む2009年4月13日から同年9月18日まであり、合計で52日間の観察を行った。1名の対象児につき1回3分15秒間のビデオ撮影を24回行い、全対象児の総観察時間は1337.3分であった。

本節で分析した子どもの行動は、向社会的行動（協力、援助など）、積極的行動（提案、勧誘など）、消極的行動（傍観）、肯定的行動（賞賛、笑顔など）、中立的行動（呼びかけ、質問など）、依存的行動（要求、同意を求めるなど）、攻撃的行動（攻撃、横取り）、指示的行動（指示・命令、禁止など）、

反応行動（無反応・無視，許可など），教師への働きかけ，近接他児数であった。

3歳児の向社会的行動は，非常に生起しにくい行動であった（例えば，協力行動：0.97回/60分）。子どもの教師への働きかけの出現割合<sup>注4)</sup>は，男児が9.7%，女児が13.7%であり，男児よりも女児に教師への働きかけが多かったが有意ではなかった。また，30秒の単位時間ごとに男児と女児の1m以内にいた平均近接他児数は，男児が1.0人，女児が1.3人で，女児のほうが有意に多かった ( $t=16, p<0.05$ )。

5歳時の観察対象児は，18名（男児8名，女児10名）の子どもであった。5歳時の観察期間は，2011年6月28日から2012年3月15日であり，合計で47日間の観察を行った。5歳時では，1名の対象児につき1回3分15秒間のビデオ撮影を20回行い，全対象児の総観察時間は1196.8分であった。

3歳時と5歳時における子どもの対人行動の全体的特徴を比較したところ（対応のある  $t$  検定），他児に対する多くの友好的な行動（積極的行動の提案や勧誘，肯定的行動の励ましや笑顔など）について，3歳よりも5歳のほうが行動の生起回数が有意に多かった（例えば，提案： $t=3.23, p<0.01$ ）。一方，おもちゃの横取りは，3歳よりも5歳のほうが有意に少なく ( $t=2.75, p<0.05$ )，子どもの社会性の発達が伺えた。また，観察中に対象児がどのくらい教師へ働きかけたかを分析した結果，3歳よりも5歳のほうが行動の出現割合が低かった ( $t=4.09, p<0.01$ )。さらに，30秒の単位時間ごとに，その時点で対象児の半径1m以内にいた他児人数は，3歳よりも5歳のほうが有意に多かった ( $t=8.51, p<0.001$ )。このことから，3歳のときには子どもは教師のそばで教師に働きかけながら遊んでいたが，5歳になると，友達の近くで，あるいは友達と一緒に遊びを展開していたことがわかる。個々の児をみると，慰め行動以外の向社会的行動について，3歳時に向社会的行動を行った児は，5歳時においても表出する傾向がみられた。また，このような傾向は，他の多くの行動についても同様に認められた。さらに，向社会的行動を多く行う児は，複数の種類の向社会的行動を行う傾向があった。

## 第2節 母親の対児行動と子どもの対人行動との関連

本節では，幼稚園登園場面において母親が子どもに示した種々の行動の生起と，自由遊び場面で子どもが表出した対人行動の質や量に関連があるかを検討した。

3歳時の登園場面における母親の対児行動について，それぞれの行動ごとに，表出頻度の高低を調べた。子どもについても，自由遊び場面で観察された対人行動のそれぞれについて，表出頻度の高低を調べ，母子間の関連を検討した。その結果，世話行動が少なく，愛情表出行動と分離時特有の行動を多く行っていた母親の子どもに，表出した対人行動のバリエーションが多い傾向がみられ，

---

注4) 単位時間を10秒とし，10秒間の観察単位中に，教師への働きかけが観察されれば1を，観察されなければ0を記録した（ワン・ゼロサンプリング法；Altman, 1974）。ここでいう出現割合とは，全観察単位を母数としたときの，教師への働きかけが観察された観察単位数の割合のこと。

向社会的行動の生起回数も他児より多かった。一方，登園場面で様々な対児行動を行い，特に世話行動を多く行っていた母親の子どもは他児への働きかけが消極的で，教師に働きかけることが多か

った。

5歳時では、愛情表出行動が多かった母親あるいは分離時特有の行動が多かった母親の子どもに、向社会的行動が多く観察される傾向が認められた。

## 第5章 総合論議

研究1と研究2より、女兒の母親は娘に対して肯定的な感情をもち、日常的に一緒に過ごすことが多く、それゆえに幼稚園入園による子どもとの分離をさみしく感じ、分離の直前に、より多くの愛情表出行動と分離のあいさつ行動を行ったと考えられる。高木・柏木(2000)は、母親は息子よりも娘に対して「自分と一心同体のものである」という気持ちを強く示すことを明らかにしたが、本研究で得られた結果も、母と娘の心理的距離の近さを表していると考えられた。また、3歳時と5歳時における登園場面での母親の対児行動を縦断的に分析した結果、3歳時に愛情表出行動を多く表出した母親は、5歳時でも多く表出するという一貫性が認められた。これは、世話行動や分離時特有の行動についても同様の傾向がみられた。子どもがアタッチメントを形成するには、アタッチメント対象からの一貫性のある働きかけや応答が重要であり(Ainsworth, 1978/1983)、本研究で対象とした母親は、子どもの年齢(発達)に応じて、対児行動の量を調節はしていたものの、それぞれが一貫性をもったかわりかけを行っていたことが明らかとなったことから、本研究で対象とした多くの子どもの母親とのアタッチメントは安定していたことが推察された。

研究3より、子どもの向社会的行動は、3歳時と5歳時のいずれにおいてもあまり多くは観察されなかった。攻撃行動以外の対人行動は、3歳よりも5歳に多く観察され、対象児の近くにいた他児の人数も5歳のほうが多かったことから、子どもの社会性の発達や仲間関係の広がりが増えた。また、3歳時と5歳時における子どもの対人行動を縦断的に分析した結果、3歳時に向社会的行動が多く観察された児は、5歳時でも多くの向社会的行動が観察された。このような傾向は、他の多くの対人行動についても同様に認められ、子どもの対人行動も、母親の対児行動と同様に、3歳時と5歳時における一貫性がみられた。

研究1から研究3までの結果を総合し、母親の対児行動と子どもの対人行動に関連があるかを検討した結果、3歳時の登園場面に、愛情表出行動と分離時特有の行動を行っていた母親の子どもは、他児に対する対人行動が多く、特に向社会的行動の生起回数が多かった。逆に、登園場面で世話行動を多く行っていた母親の子どもは、対人行動が消極的である傾向があった。5歳時では、登園場面に愛情表出行動あるいは分離時特有の行動が多い母親の子どもは、向社会的行動を多く行う傾向があった。母親の愛情表出行動は、なでる、抱きしめるなど、親和的な身体接触を伴う行動であり、このような行動が、子どもの母親とのアタッチメント形成に重要な役割を果たすことは先に述べた(Harlow, 1958; Ainsworth, 1978/1983)。アタッチメントが安定している子どもは、向社会的な行動を表出しやすい傾向があり(Kestenbaum, et al., 1989)、3歳時における本研究の結果もそれと一致した。しかし、5歳時の登園場面で母親が行った愛情表出行動のほとんどは、直接子どもに触れることのない「笑顔」であった。福田・鈴木・吉武・久富・澁谷(2008)が、乳児とその母親を対象とした研究において、母親の笑いの表出が、子どものアタッチメント安定性に大きな影響を与

えていることを明らかにしていることから、母親が直接子どもに触れなくても、母親が子どもに笑顔を向けることで、アタッチメントを安定させるのであろう。このことが、子どもの向社会的行動の出現につながったと考えられる。その意味で、幼児期後期の子どもにとっての分離時特有の行動も、直接ふれあうことはなくても、子どもが母親から教師や他児へとアタッチメント対象を切り替える瞬間をきちんと見守ってくれているという安心感を与える行動なのかもしれない。

研究2の結果で、登園場面での愛情表出行動と分離時特有の行動の出現は、男児の母親よりも女児の母親のほうが多かったことを明らかにした。そうであるならば、男児よりも女児に多くの向社会的行動が観察されるはずであるが、必ずしも女児に向社会的行動が多かったわけではなかった。第5章第1節で述べたように、向社会的行動を多く行った子どもの母親の対児行動の特徴は、愛情表出行動と分離時特有の行動が多いことに加えて、世話行動があまり多くないことであった。戸田(2006)は、子どもの向社会的行動と過保護との間に負の関係があることを報告しており、母親があれこれと子どもの世話をしやることは、どれほど愛情を伴っていても、限度を越えてしまうと子どもにマイナスの影響を与えてしまう可能性がある。これは世話行動に限ったことではなく、母親からの愛情表出行動や分離のあいさつも、子どもの発達や状況に合わせて適切な方法で行われるべきである。本研究で向社会的行動を多く行った子どもの母親は、子どもの発達や状況を適切に判断し、それに応じた行動をするのが上手な母親であったと言える。アタッチメント形成には、子どもに対する母親の感性や応答性が重要であり(Ainsworth & Witting, 1969)、アタッチメントが安定している子どもは向社会的な行動を表出しやすい傾向がある(Kestenbaum, et al., 1989)ことから、このような母親の子どもに、向社会的行動が多く観察されたと考えられた。本研究では、母親の対児行動と子どもの対人行動との間に少なからず関連が認められたが、本研究では、アタッチメントを測定したわけではなく、アタッチメントの様相を母子の行動から推測したものである。そのため、対象の子どもが、母親との間にどのようなアタッチメントを形成しているかを測定すれば、母親の行動と子どもの行動の関連がさらに明確化したかもしれない。しかし、母親からの行動だけが子どもの行動表出に影響するわけではない。また、母親の行動も子どもの状況や気質などの影響を抜きには語れないため、今後は子どもの側の要因も検討する必要もある。さらに、本研究で対象としたのは1園の19名の母親であり、本研究の成果を一般化するには、他の幼稚園や保育所を対象としたさらなる研究の蓄積が必要であろう。

## 引用文献

- Ainsworth, S. (1983). *アタッチメント: 情緒と対人関係の発達* (依田明, 訳). 東京: 金子書房.  
(Ainsworth, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.)
- Ainsworth, M. D. S. & Witting, B. A. (1969). Attachment and exploratory behaviour of one-year-olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.) *Determinants of infant*

- behavior* (Vol. 4). Metheum. 113-136.
- Altman, J. (1974). Observation study of behaviour: Sampling methods. *Behaviour*, 49: 227-267.
- 青木弥生(2001). 親子間「スキンシップ」における子どもの性別の影響. *ヒューマンサイエンスリサーチ*, 10: 13-30.
- Baumrind, D. (1966). Effects of parental control on child behavior. *Child Development*, 7: 888-907.
- Bowlby, J. (1983). *母子関係の理論 I: 愛着行動* (黒田実郎・岡田洋子・宮前珠子, 訳). 東京: 岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books. )
- Clay, V. S. (1966). The effect of culture on mother-child tactile communication. Ph. D. dissertation, Columbia University.
- Eisenberg, N., Lennon, R. & Roth, K. (1983). Prosocial development: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 19: 846-855.
- 遠藤利彦(2005). アタッチメント理論の基本的枠組み, 数井みゆき・遠藤利彦編著. *アタッチメント-生涯にわたる絆*(pp. 1-31). 京都: ミネルヴァ書房.
- 福田佳織・鈴木義也・吉武光世・久富節子・澁谷智久(2008). 母子相互作用内に見られる母親の笑いと母親の感受性との関連およびそれらが子どものアタッチメント安定性に及ぼす影響. *東洋学園大学紀要*, 16: 83-95.
- Grusec, J. E. & Goodnow, J. J. (1994). Impact of parental discipline methods on the child's internalization of values: A reconceptualization of current points of view. *Developmental Psychology*, 18: 199-214.
- 花沢成一(1992). 母性感情の発達, *母性心理学*. 東京: 医学書院.
- Harlow, H. F. (1958). The nature of love. *American Psychologist*, 13: 673-685.
- 本島優子(2012). 乳児期の子どものアタッチメント安定性と幼児期の社会情動コンピテンス-縦断的検討. *発達研究*, 26: 141-148.
- Kestenbaum, R., Farber, E. A. & Sroufe, L. A. (1989). Individual differences in empathy among preschoolers: Relation to attachment history. In N. Eisenberg (Ed.), *Empathy and related emotional responses. New Directions for Child Development*, 44: 51-64.
- 高向山(2005) 「登園場面」における母親の行動特性の日中比較. *異文化間教育*, 21: 57-72.
- Ladd, G. W., & Sieur, K. D. (1995). Parents' and children's peer relationships. In M. Bornstein (ED.), *Handbook of parenting*, Vol.4, Lawrence Erlbaum: N. J. (pp.377-409).
- Lewis, C. (1981). The effects of parental firm control: A reinterpretation of findings. *Psychological Bulletin*, 90: 547-563.
- 森下正康(1998). 幼児期の母子関係が子どもの思いやりにおよぼす影響. *和歌山大学教育学部紀要 教育科学*, 48: 1-13.
- Putallaz, M., & Heflin, A. H. (1990). Mother-child interaction In S. R. Asher & J. D. Coie

(EDs). *Peer Rejection in Childhood*. Cambridge University Press.

園田菜摘・北村琴美・遠藤利彦(2005). 乳幼児期・児童期におけるアタッチメントの広がりと連続性, 数井みゆき・遠藤利彦編著. *アタッチメント-生涯にわたる絆*(pp. 80-113). 京都: ミネルヴァ書房.

高木紀子・柏木恵子(2000). 母と娘の関係-夫との関係を中心に. *発達研究*, 15: 79-94.

戸田須恵子(2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について. *釧路論集-北海道教育大学釧路校研究紀要*, 38: 59-69.